

名古屋大学大学院工学研究科  
機械システム工学専攻

**酒井 康彦 教授**

昭和 53 年卒業(第 37 回)



私は昭和 53 年（1978 年）に機械学科（古屋善正研究室：流体機械講座）を卒業いたしました。時が経つのは早いもので、東山会の会員になってから 40 年の歳月が流れたことになります。機械学科卒業後は大学院（当時は機械工学・機械工学第二専攻）博士前期課程、後期課程と進学し、その後、縁があつて昭和 58 年 4 月にそのまま工学部の助手にさせていただきました。とはいっても学位取得には至らず、単位取得退学という状態でまだまだ修行が足りないといった感じでした。工学部に所属したのは 1 年間のみで、2 年目に当時の教養部図学教室に配置換えになり、その後 4 年半、図学・製図教育に携わりました。当時の図学教室には田嶋太郎教授、峯村吉泰助教授、横沢肇助教授、三矢保永助教授がおられましたが、特に田嶋先生のコンピュータ図学へのご研究の情熱・バイタリティーに圧倒された記憶があります。教養部に移った当時は、工学部での学位取得のための研究が最終段階に入っており、悪戦苦闘してようやく学位論文を書きあげ、学位取得ができたのが昭和 59 年 11 月で、大学院退学後 1 年半を要しました。学位論文研究は古屋先生の研究室を引き継いでおられました中村育雄先生のご指導の下に、水力実験室（機械学科実験棟）にて進めさせていただきました。その後、教養部にて講師に昇任させていただき、しばらく教養教育に従事しておりましたが、昭和 63 年（1988 年）4 月に工学部にもどり、それ以来中村研究室にて機械系の教育・研究に携わりました。そして、時代は平成に移り、工学部・工学研究科は幾度かの改組がありましたが、中村先生のしっかりしたご指導のもとで一貫して流体工学研究に取り組むことができたことは望外の幸せでした。特に、この時代で私の研究人生で大きな出来事がありました。それは英国ケンブリッジ大学応用数学および理論物理学科（Department of Applied Mathematics & Theoretical Physics : DAMTP）への留学でした。平成元年（1989 年）8 月に妻と 0 歳の長女をつれて英国に渡りましたが、慣れない外国生活の経験もさることながら、おそらく当時流体力学（特に乱流分野）の中心拠点とだれもが認める DAMTP にて、Dr. J. C. R. Hunt（後年、英国王立協会フェロー就任、ケンブリッジ大学教授、英国気象庁長官、

ロンドン大学教授、英国上院議員を歴任し、現在 Baron Hunt of Chesterton として英国貴族に列せられております)の研究グループで研究生活を送ることが出来たことは、その後の私の人生に決定的な影響を与えました。DAMTP での研究生活はじつは Hunt 先生は超多忙で、あまりディスカッションできなかつたのですが、むしろ Hunt グループのポストドクであった Dr. Richard Perkins (現フランスリヨン大学教授)、大学院学生の J.C.H. Fung さん (現香港科技大学教授)、J.C. Vassilicos さん (現英国インペリアルカレッジ教授) といった若手研究者や学生諸君との交流が実に楽しく、深く流体力学の勉強に役に立ちました。DAMTP への留学は平成 2 年 (1990 年) 11 月まで続きましたが、その後、DAMTP で学位取得後ポストドクをしていた J.C. Vassilicos さんの招きで、再度平成 6 年 (1994 年) 10 月から平成 7 年 (1995 年) 3 月末まで DAMTP で共同研究をさせていただきました。今度は単身赴任でした。この 2 度にわたる DAMTP で得た知友はその後の私の人生にとって大きな財産となりました。平成 13 年 (2001 年) 4 月より中村研究室を引き継ぐ立場となり、現在に至っておりますが、私の教育研究の基盤はやはり中村先生とともに過ごした時代ですすでに確立していたように思います。

さて、いま私は東山会への会員便りを執筆していますが、私の手元に 3 冊の本があります。そのうち 2 冊は古屋先生が名古屋大学から離れるときにサインを頂いた古屋先生ご自身の著書「流体力学 I、II」(共立出版)であり、もう 1 冊は中村先生から頂いた「知的人生に贈る、どう生きるかを考える書」(田中菊雄著、渡部昇一特別解説、三笠書房)です。これらの書物は、私のこの 40 年間にわたる名古屋大学での教育研究の精神的基盤となっているものです。古屋先生のサインは、ただ一行「酒井康彦君の一そうの発展を祈って、53.3.1 古屋善正」であります。いまでも時々この本を開くことがあります。その都度、古屋先生の優しいまなざしが思い出されて、また頑張らねばと心を振るい立たせています。中村先生から頂いた「知的人生に贈る、どう生きるかを考える書」には多くの人生訓が記載されており、研究室の若い先生方や学生諸君にも事あるごとにこの本を読むことを勧めております。昨年度 (平成 29 年度) の東山会会報の副会長挨拶でも記載させて頂きましたが、日本民族の特徴は、「恩誼を知る」ことであるといわれております (新渡戸稲造「自警録」第十八章)。私の人生を顧みるとき、いまの自分はひとえに古屋先生や中村先生を始め、数多くの恩師、先輩、同僚、後輩の方々そしてなによりも家族の支えがあつてのことと思います。あらためて深い感謝の念を懐く次第でございます。東山会は名古屋大学機械系の卒業生の集まりであります。同窓の繋がりからいただける「恩誼」は会員の皆様にとってもなによりの財産ではないでしょうか。

最後になりますが、東山会同窓会の皆様のご幸福を願いつつ、東山会のご発展を切にお祈り申し上げて拙文の筆をおかせていただきます。